

日本記者クラブ会報

第 443 号
2007 年
(平成 19 年)
1 月 10 日発行

〒一〇〇一〇〇一
東京都千代田区内幸町二ノ二
日本プレスセンタービル
◎社団法人 日本記者クラブ
<http://www.jjpc.or.jp>

国の近未来可視するニュース

理事長 滝鼻 卓雄

日本記者クラブの会員みなさん、明けましておめでとうございます。今年 2007 年（平成 19 年）がすべての会員のみなさんにとって、実り多き 1 年になることを心より祈っています。みなさんのご協力とご理解をお願い申し上げます。

この 2007 年が私たちジャーナリストにとって、重要な年になることは言うまでもありません。

昨年の 2006 年を回顧すると、この国の内外において、あらゆる価値観が揺らぎ、それに伴って、私たちが担うニュースの価値判断も様々な変化を見せ始めています。

具体的に指摘しますと、ライブドアや村上ファンドという利益至上主義企業・集団のトップが逮捕されたこと、家族間の悲惨な事件が相次



昨年 1 月のクラブ会報で、私は「このこと、談合や汚職で 3 人の県知事が摘発されたことなどです。」

昨年はクラブ創立以来の懸案だった最高裁長官の会見も実現した—司会の滝鼻理事長(右)と町田顕長官(当時)=6.23

だこと、談合や汚職で 3 人の県知事が摘発されたことなどです。昨年 1 月のクラブ会報で、私は「こ

の社会の構造が、あるいは倫理道徳がいろいろな分野で崩壊し、または崩壊の前兆を見せ始めた」と指摘しましたが、残念なことではあります。その予兆は現実のものとなってしまいました。

国の外に目を向けると、イランがウラン濃縮を公式に認め、北朝鮮はミサイルを発射した上に、核実験まで実施しました。イラクに本格政府が発足したとはいえ宗派対立は激しくなるばかりです。アメリカの中間選挙で民主党が勝利したことによって、ブッシュ政権への支持が不安定になり、国際政治には流動化の兆しが見え始めています。また国際経済の見通しも明確ではありません。

このような状況の中で、昨年 9 月安倍政権がスタートしました。

日本記者クラブの最重要な役割は、この国の近未来を可視するニュースを発信することです。昨年 9 月に自民党総裁選の各候補者をクラブにお招きし、候補者同士の議論と記

ピチピチ生きのいい発信を

者側との質疑応答を実施できたことでクラブの役割は一応果たされたといえるでしょう。9月26日、安倍内閣が発足してからの「動き」はご承知の通りですが、その「動き」をクラブからの確に発信できたかどうかは正直言って自信がありません。

もちろんクラブ企画委員の熱意によって、様々な分野のニュースを提供し続けることができました。

しかし、世界のジャーナリズムの舞台における日本記者クラブの存在感にいまひとつ物足りなさを感じます。その責任は私の力不足にあることは十分承知していますが、現場のジャーナリストたちが「あそこに行けばニュースがある」と期待を持たせるようなナショナル・プレスクラブにしたいものです。

ニュースは「生もの」です。賞味期限の過ぎたニュースは価値のないニュースです。二番煎じのニュース・メーカーをクラブにお呼びしても何の意味もありません。生き生きとしたニュース・メーカーたちの発言をつかまえて、世界に発信してはじめて日本記者クラブの使命を全うすることになると私は考えます。

今年、クラブのさらなる変貌を祈っています。

（読売新聞東京本社
代表取締役社長・編集主幹）

歴史を生かす

——新聞づくりは地域づくり——

多田昭重

元日は、歴史の古里、太宰府市の丘に立つ。昨年に続いて2度目である。ここに九州国立博物館がある。

そこで、わが社などが主催する「若冲と江戸絵画展」が始まり、その初日に立ち会う。

昨年は同じように元日からの「中国・美の十字路」展をのぞいた。穏やかな日本晴れで、つめかけた多くの参観者を見守りながら歴史と文化と地域のことを考えた。

九州国立博物館は、太宰府天満宮の隣りにある。天満宮の正月3が日の初もうで客は例年200万人を超える。そのほんの一部でも足を運んでもらったら、との思いから元日開催となった。

博物館とか美術館は、ふつう年末

年始は休みだ。それを国立の九博(以下九博と略す)が破ったのは異例のことである。

九博は、その生い立ちから異例づくめで、建設、開館までに長い年月を要したが、今、福岡と九州の地域に新しい光を生み出している。

太宰府天満宮の名物「梅ヶ枝餅」が、一昨年10月のある日、姿を消した。あまりの売れ行きにモチの皮がなくなつたという。

●…岡倉天心の夢つぐ九博

九博は2005年10月15日に開館した。開館記念特別展として私たちが、「美の国 日本」展を開いたが、11月27日までの会期中に入場者44万

1千人を記録した。

これを含め、九博は、昨年の開館1周年で、入館者220万人にのぼった。わが国には、東京、奈良、京都に国立博物館があるが、3館合わせての入場者数を大きく超えた。九博自身の年間入場者見込みが50〜60万人だったのだ。その後も好調で、「梅ヶ枝餅」が消える波及効果も生まれている。

九博は、九州にとって「百年の夢」といわれてきた。明治32年(1899年)2月、福岡を訪れた岡倉天心は、福岡日日新聞(西日本新聞の前身)記者のインタビュにこたえ、九州に博物館設置の必要性を強調した。記事は3日間連載され、これが九博誘致運動の始まりとなった。

もう108年も前のことである。

官民あげての運動を続け、西日本新聞も「博物館等設置推進九州会議」を組織して、先頭に立った。その後の曲折はよく、新聞が言論機関として、地域とともに国を動かした成果のひとつだ。

九博の基本理念は「日本文化の形成をアジア史的観点からとらえる」ことにある。九州は古くからアジア文明の交流拠点だった。今、アジアの時代といわれる時に、この九博が実現したことは意義深い。

九博の人氣は常設館の内容と特別展の質、それに地域をあげてのボランティア活動など柔軟で新しい運営によるところが大きい。三輪嘉六館長の発想の豊かさや自由な対応も見逃せない。元且開館などは、三輪館長の決断あつてこそである。

●…大連、釜山と記者交流

そうした中で私は、「アジア、歴史、地域」を新しい年のキーワードと考えている。歴史認識を持つてアジア諸国との交流を推進する。地域づくりに長期的な視点と取り組みが欠かせない、という意味である。

これは、日本の国づくりにしても、言論機関としての新聞にとっても重



ただ・あきしげ 1935年生まれ
57年西日本新聞入社 経済部長 東京支社長 取締役編集局長 専務取締役営業本部長を経て 2001年代表取締役社長 04年から共同通信社理事会長を務める

要なことだと考える。
昨年10月下旬に私は中国を1週間訪問し、大連、広州、北京の三都市を回った。大連では大連日報社との記者交流などで相互調印し、広州市では人民日報華南分社との友好を深めた。北京では李肇星外相と親しく対談することができた。
広州博物館を訪れたとき、入り口に「未来の百年を把握するためには、過去の五千年を理解しなければならぬ」と書いた表札が掲げられてあった。
いかにも中国らしいが、李外相も「中日両国の友好の大道は、どんなものでも阻めない。そのことを立証

していきましょう」と話された。

安倍首相の初の訪中直後で、日本に対する中国側の雰囲気は温かいものに変わっていたが、李外相は、中国と九州の長い交流の歴史をよくご存じだった。

北朝鮮の核問題で、国際情勢はいぜん緊張しているが、日中友好はあと戻りさせられない。

9月には韓国・釜山市を訪問、釜山日報創刊60周年の式典に参加した。「日韓海峡圏」の発展策を探ろうと、福岡市と釜山市の各界リーダー計22人で組織する「福岡・釜山フォーラム」を発足させた。今年9月には福岡市で2回目のシンポジウムを開く。

釜山日報社とは交流10年に及び、互いに記者を派遣・滞在させる交換記者制度を実施している。アジア諸国との交流について私たちは報道の充実と地域ぐるみの実践をしている。

●中山間地の「限界集落」

九博について大原美術館理事長の大原謙一郎さんは「京都博物館以来、百余年ぶりに東京を遠く離れた太宰府に国博が誕生した。過去百年間、文化スポーツ施設に費やす国税の大半が首都圏に集中されてきたこの潮

流が変わり、文化政策に地方への思い入れと気配りが増してくれば、日本は今よりずっと魅力あふれる国になるに違いない。(中略)

私は十年後の日本は、かぐわしい文化の薫りと心豊かな生活の喜びが広く全国各地の町や村で実感できると切に願っている」と期待を寄せられている。(「昨年朝日新聞への寄稿」)

私も全く同感だが、実態は必ずしもそうではない。文化政策のみならず国の政策全般が地方、地域から離れていっているように思える。

格差社会の最たるものは、中央と地方ではないか。九州の中山間地域では、65歳以上の高齢者が5割以上の、いわゆる「限界集落」が多数出ている。地方、地域の自助努力が必要なことは言うまでもないが、歴史的に見ても、日本の政治が地方に温かかった時があるだろうか。

地域が元気でなければ、国が元気になるはずがない。地方、中央といういい方は好きではないが、地域からの発言、発信が新しい年はますます重要である。

西日本新聞は4月17日に創刊130周年の記念日を迎える。「温故知新」の意味をこめ、ふたつの事例を書きとめておきたい。

●地域を見つめる使命

岡倉天心が福岡に来たころ、森島外は小倉で軍医部長をしており、「我をして九州の富人たらしめれば」との論文を福日に寄稿した。

筑豊の炭鉱主たちが金銭を湯水のように散じるのを見て、自分なら学問や芸術のために使うと風刺して覚醒を求めた。炭鉱経営者安川敬一郎が呼応して現在の九州工業大学が生まれた。

今に戻って、昨年、わが社の年次企画「検証水俣病50年」シリーズが新聞協会賞と「早稲田ジャーナリズム大賞」を受賞した。

この企画取材には、全体で50人近い記者が参画し、その多くは「水俣病は小学校の教科書で学んだ」という若い記者たちだった。

水俣病は、公式確認から半世紀を過ぎた今も「救済」を求め患者認定を申請している被害者は4千人を超えている。

地域の問題に終わりは無い。その地域を見つめ、分析、検証し活字で報道し続けることが私たちの使命である。

新聞づくりは地域づくりだと考えている。

小菅 正夫 旭山動物園長

12・1(金) 記者会見 司会 高橋雅博 理事
出席 65人

▼命を伝える動物園

10年で入園者数を10倍の280万人にするという驚異の集客力。旭山動物園の人気理由は、小菅園長をはじめとする職員への愛情にあると、あらためて納得した。



アザラシの円柱水槽や、ヒヨウを下から見せる頭上展示など、今では、入園者をアツと言わせる施設の斬新さばかりが目につくが、実は旭山の改革は「命」をどう伝えるか、から始まったという。

「命」という言葉、命が大切である、ということ伝えるのは簡単だが、命そのものは言葉では伝えられない。直接動物と触れ合うことで命を感じてもらいたかったのです」

最初に作った施設は、動物本来の行動や能力を見せる旭山独自の手法として全国から注目を浴びている「行動展示」とは関係がない「こども牧場」だった。

その後には作られた数々の施設で買われているのも、やはり命だ。オンラインウータンが手を伸ばしてロープを渡る姿が見れる「空中散歩」。この施設を作ったからオンラインウータンが活動的になり、子どもも生まれた。

「本来の野生動物に近い生活をしていけば、希少動物でも繁殖する。そして、動物たちの子育ての姿を子どもたちに見てもらいたい、人間の生きる意味を考えるきっかけになってほしい」。命を見る目は温かい。

「うちの職員は、なんの教育もしていないのに、みんな動物の代弁者になっちゃう」と園長。アイデアとユーモア、行動力にあふれる園長の下で、職員たちが動物の魅力に引き込まれていく姿が浮かんでくる。

「まだ道半ば」と強調する。「旭川と世界が、川や海でつながっていることを伝える環境教育を充実させた」という目標があるからだ。日本最北の「命を伝える動物園」から、しばらく目が離せない。

北海道新聞東京支社 酒井信太郎

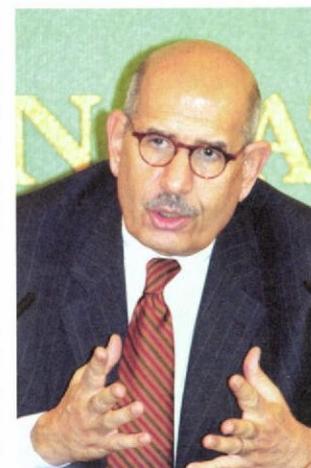
モハメド・エルバラダイ IAEA事務局長

12・1(金) 記者会見 司会 春名幹男 委員 通訳 池田薫
佐々江信子 出席 100人

▼核の番人の自負と危機感

北朝鮮の核実験から約2カ月後の訪日。記者会見での質問も北朝鮮の核問題に集中した。「六カ国協議の現状をどうみるか」「北朝鮮への査察準備は」。

国際原子力機関(IAEA)は2002年12月に査察官を北朝鮮から追放され、手も足もでない状況が続く。それでも事務局長は同問題に積極的にコミットしてきた。



在ウイーンの北朝鮮大使館との非公式接触、日本、米国など関係国への働き掛け。「私はこの問題が核不拡散体制にとり最も緊急性を持つと警告してきた」。1990年代から問題に取り組んできた「核の番人」の自負がのぞく。

しかし、IAEAなどの努力にもかかわらず、北朝鮮は核拡散防止条約(NPT)脱退宣言、核保有宣言、そして核実験と事態をエスカレートさせてきた。「問題解決のためには

エネルギーシユに早めに手を打たねばならない」。事務局長の言葉からは強い危機感がひしひしと伝わる。

IAEAと事務局長は一昨年、核不拡散への貢献によりノーベル平和賞を受賞した。北朝鮮やイランなど相次ぐ核問題、一方で進まぬ核軍縮。

IAEAには揺らぐ核不拡散体制を立て直しに向けた取り組みが期待されるが、事態はあまりに深刻で解決は容易ではない。

ウイーン特派員時代に数え切れないほどの事務局長の会見に出席した。聞き取りにくい英語でも最後まで身を乗り出すようにして聞き、どんな質問にも丁寧に答える誠実な態度は変わらない。

当時、IAEA報道官は「本当はシャイなんだけど、最近ではマスコミ対応にもだいたい慣れた」と笑っていたが、今回の会見での堂々たる応答ぶりにはや国際社会のキーパーソンのそれだった。

共同通信外信部 小林 義久

鈴木 琢磨 毎日新聞編集委員

12・4(月)研究会「北朝鮮」⑧ 司会
川戸恵子委員 出席 105人

▼愛をもって「真意」を読む

拉致、ミサイル、核開発と、意表をつく瀬戸際策で国際社会を振り回し続ける北朝鮮。この国を理解するには、どうすればいいのか。

「愛をもって真意を読む」

硬軟問わず北朝鮮問題にこだわる鈴木琢磨氏は、こんな持論を披露した。東京にも情報は多いのに、実は分析手法の底が浅いのだという。

ヒントは「『ナゾ』とか『ベールに包まれる』という形容詞をメディアが早くやめ、在日社会の秘匿された情報や歴史、日朝の接点や動きをいかに引き出すか」にあるという。

そうした手法をもとに、金正日総書記の後継者問題と拉致事件のふたつの題材を読み解いてみせた。

前者では、昨年7月に平壤で出版された伝記を取り上げた。金正日総書記の妻、高英姫夫人が柔道家だった父親の生涯をつづった内容だが、04年に死亡説が流れた高夫人の伝記がなぜ今、世に出回ったのか。

鈴木氏は、軍内部で高夫人を偶像化するキャンペーンが起きた02年、息子の正哲氏が後継者の有力候補に

挙がった過去の事例をもとに、「後継者問題に何らかの決着があったのではないか」と推測する。

拉致事件では、なぜ拉致という行為に及んだのかにも踏み込んだ。

北朝鮮では、どの百貨店や学校で



も動物や鉱石の標本を見かけたという。実物を教材にする北朝鮮の「直観物教育」が、

70年代以降、金総書記への権力移行の流れと重なり、対南工作のために「本物の日本人」を必要としたのではないかと読んだ。

のんびりした大阪弁の語り口の端々に、北朝鮮問題に真剣に取り組んでこなかったメディアと政府への批判が混じる。冷戦時代、クレムノロジという旧ソ連中枢を知るための学術領域があったが、本格的な「平壤分析学」創設の勧めと聞いた。

朝日新聞編集委員 谷田 邦一

フィリップ・キルシュ 国際刑事裁判所長

12・6(水)記者会見 司会 矢島誠司
委員 通訳 池田薫 出席 29人

▼日本に早期加入を促す

国際刑事裁判所 (International Criminal Court ≡ ICC) といっても、日本では、一般的には、まだまだなじみがない。国際司法裁判所 (International Court of Justice ≡ ICJ) との違いを知っている人も多くない。

ICCは1998年にローマでの国際会議で採択されたICC規定に基づき、2003年に発足したばかりの独立機関だ。ジェノサイド(大量殺人)や人道に対する罪などを犯した個人を裁く。

ちなみにICJの方は、国連の常設機関で、60年の長い歴史を持つ。主に国家間の法律的紛争を処理する国際法の権威だ。

ICCには現在、世界の104カ



国が加入しているが、日本はまだ加入していない。

そこでICC初代所長となったキルシュ判事(カナダ人)は、その存在意義を説き、日本に早期加入を促すために来日した。

記者会見では、なぜICCが設立されるに至ったか、司法権はあるが執行権は加盟国にしかないというICCの特徴と限界、各国の協力の重要性などを説いた。

「ICCの存在が、すでに重大犯罪に抑止の効果をあげている」とも強調した。

幸い、安倍晋三内閣は今年中にもICCに加入する方針を示しており、キルシュ所長は、「日本の加入は他のアジア諸国の加入をリードするだろう」と歓迎した。

ICCには、米国、ロシア、中国、インドなども未加入だ。米国は海外派遣兵士が訴追される恐れがあると反対してきたが、キルシュ氏は控え室で、「米国には純粋に司法活動であることが徐々に理解されてきた」と期待感も示した。

産経新聞論説副委員長

矢島 誠司

北岡 伸一 前国連次席大使

▼常任理入り一番手は日本

北岡教授は2004年4月から昨年9月まで、民間人として初めて国連大使に起用された。任期中の昨年7月には北朝鮮のミサイル実験実施を受け、安保理での非難決議採択にたずさわると、国連を舞台にした日本外交の最前線で奔走した。そのため、研究会は具体性に富み、時に生々しく、そして説得力のある主張が展開された。

印象的だったのは、教授が「日本の常任理事国入りに反対する国連加盟国はほとんどない」と繰り返し述べたことだ。報道では中韓が歴史認識をめぐって反対する姿勢が目立っていたが、実際の国連外交の舞台では、日本の常任理入りを認める声が大勢を占めるという。ただし、米国は「日本だけなら認める」、パキスタンは「インドが入らなければいい」など、条件をつける国が多い。

各国の利害、思惑が複雑に絡み合うだけに一筋縄ではいかないのが現実だが、「常任理入りが一番手は日本だ」と教授は言い切る。それは現場をかくぐった経験に裏打ちされ

12・8(金) 記者会見 司会
春名幹男委員 出席 68人



た「確信」

があるからにはか

ならない。

だが安

保理改革

はなかなか

か進展し

ていな

い。G4

と米国の

間で揺れる日本は、改革案提出にこぎつけない状況だ。

それでも教授は「安保理改革が失敗したとは思わない」と前向きだ。多くの政府首脳と接触し、つながりのなかった国と友好関係を築き、日本のプレゼンスを高められたため、今後、改革を進めていく上で大きな財産となるのだろう。

教授は「東京から改革案提出のゴーストが出なかった」など、時折悔しさをにじませる場面もあった。

在任中、プロバターの官僚を前に思い通りにいかないこともあったようだが、そこに今の日本外交の突破口があるような気がしてならなかった。

読売新聞国際部

大木 聖馬

「夜回り先生」水谷 修氏

▼子どもの側に立て

いじめや子どもの自殺など様々な問題が噴出し、教育改革はいまや国会論議の焦点だが、大切なのはやはり現場の教師の視点だろう。進学校の教師から、問題の多い夜間高校に自ら転じ、夜の街に居場所を求める若者たちに直接向き合ってきた「夜回り先生」の発言には傾聴すべきことが多い。

「22年の教員生活で、子どもをしかったことはな

い」と言い切る。

子どもをほめる、

優しい言葉をかけることの大切さを強調し、子どもの側に立つよう大人に訴えている。

水谷修先生は薬物問題にライフワークとして取り組んだ。薬物は脳や神経系を壊すから深刻である。救いを求める少女の腕に無数のリストカットを初めて見たとき、「一緒に生きてみるかい」と語りかけた。

日本はイライラした社会になっ

12・13(水) 研究会「若者と教育」①
司会 石井勤委員 出席 63人



た。非行に走る子どもで10年前に一番多かったのは夜の世界に入ることだったが、最近は減り、これから暴走族も無くなるという。いま増えているのはいじめだ。仲間をいじめてガス抜きする。いじめができない心優しい子どもたちは不登校になり、抑圧されたはけ口をメールに求める。

子どもたちは生きる力を失いつつある。このままではこの国は子どもたちの自殺大国になる。統計で年間3万人の自殺というが、事故死や中毒死を含めると、自殺はもっと多いはずだ。

教育再生会議については、「怒り心頭」という。いじめている側を学校から排除しようとしているが、いじめている子ども、いじめられている子ども、ともに大事な子どもなのだ。和解決の方法はない。

自己肯定感のある子、自信のある子どもを育てることの重要性を強調した点に、共感を持てた。

朝日新聞出身

石川 陽治

羅 鍾一 ジョンイル
駐日韓国大使

12・20(水)昼食会 司会 竹田保孝理事 菅原一善委員
通訳 洪志媛韓国大使館広報官補 出席 10人

▼埋められるか「認識の差」

絶妙のタイミングでの会見だった。北朝鮮核問題をめぐる6カ国協議が北京で進行しており、今年12月19日投票の韓国大統領選挙まで、ちょうど1年。国連事務総長に就任した潘基文氏の後任である宋旻淳外交通商相の初来日も控えていた。

「メディアと違い、外交官はニュースをつくらないのが目標」と笑わせたが、日本記者クラブでの会見はよほど「ニュース」に縁があるらしい。昨年4月の会見は竹島問題で日韓関係が険悪な時期だった。安倍晋三首相の訪韓などで波風はやや治まったとはいえ、今度は「北朝鮮」という波風が立っている。

「日本の友人に会えば必ず、韓国



政府は北朝鮮に融和的、友好的で、北朝鮮の話聞きすぎる、と言われる。「太陽政策」と呼ばれる韓国政府の融和的な対北朝鮮政策は、昨年7月のミサイル発射や10月の核実験以降、日本や米国とのあつれきを深めている。

大使はこれまでの韓国政府の対北朝鮮政策を振り返りながら、韓国と他国の北朝鮮に対する政策の最も大きな違いは「認識の差」だと強調した。「われわれは約60年間、北朝鮮と格闘してきた。日本にとって北朝鮮は遠くにあったけど、最近になって急に近づいてきたのではないか。そこに決定的な差がある」。

だが、われわれも北朝鮮と付き合っていくかねばならない。拉致問題もある。北朝鮮との「10年後、20年後の関係を見据える」のは同じ民族にだけ可能なのだろうか。

在任2年9カ月。「2007年は日韓間によい雰囲気をつくりたい」という。その鍵は「認識の差」をどこまで埋められるか、にあるのかもしれない。

共同通信外信部担当部長

阪堂 博之

いい映画だった。クリント・イーストウッドは、やはり、ただ者ではない。

太平洋戦争末期の硫黄島攻防戦にからむ挿話を扱った、イーストウッド監督の「硫黄島2部作」の第2作である。圧倒的な物量の差の中で、玉砕に追い込まれた日本軍の指揮官栗林忠道中将の最期については、諸説があるが、イーストウッドは、切腹ではなく、拳銃自決を採用した。

脚本も練られていた。この拳銃は、栗林がアメリカに留学した記念に、アメリカの軍人仲間から贈られたものだったという設定だ。



脚本も練られていた。この拳銃は、栗林がアメリカに留学した記念に、アメリカの軍人仲間から贈られたものだったという設定だ。

パーティーで「日本とアメリカが戦争になったら、その拳銃で私の夫を殺すのか」と迫るアメリカ婦人。「絶対殺しません」と言う栗林に「個人の信念と、国の方針がぶつかったら、どちらをとるか」と問い詰めるアメリカ軍人。

イーストウッドは、硫黄島での死

©2006 Warner Bros. Entertainment Inc. and DreamWorks LLC.

硫黄島からの手紙…ナシヨナリズム超えた人間愛

折しも、アメリカでは、イラク戦争の泥沼化。日本では、核軍備論争。日米が戦ったことを知らない大学生もいるという現実。硫黄島を風化させてはならない。朝日新聞出身 浅井 泰範

07年仏大統領選

候補者もメディアも手法変えて

▼沢村 互

(朝日新聞社)

アンドウイエット(内蔵ソーセージ)が焦げる香ばしい匂いが立ちのぼり、シヤンパンの栓を抜く音がはじける。ペタンク(鉄球投げスポーツ)に興じる人々も会場にいる。

06年11月、パリ郊外で開かれた右翼政党・国民戦線の大会は、各支部の模擬店がひしめき合い、さながら大学の学園祭だった。黒い制服で目を光らせる警備班員を除けば、こわもてのイメージは感じない。

78歳のルベン党首が現れると大勢の支持者がわっと取り囲む。お年寄りや若者の黨員に一人ずつ笑顔で語りかけ、数十人のカメラマンの前で握手ポーズを取る。最近の右翼旋風をかいま見た気がした。

「日本の記者」と名乗ると、党幹部はみな愛想が良い。「日本で犯罪が少ないのは、移民を受け入れないからだ。立派な国だ」。返答に窮したが、日本通の党ナンバー2、ゴルニシユ氏から「私たちはフランスの価値を

受け入れる移民にまで反対しない。その点で日本の自民党はもろろん、民主党の一部よりリベラルだ」と言われた時は、うなづくほかなかった。

■ ■ ■
今年のフランス大統領選挙(第1回投票4月22日、決選投票5月6日)は歴史的にも目が離せない選挙になりそうだ。

社会党は、政権をねらえる大政党として初の女性候補である元環境相ロワイヤル氏(53)を公認選出。与党の民衆運動連合(UMP)からは党首のサルコジ内相(51)が名乗りを上げた。ともに戦後生まれのポスト団塊世代。世論調査の支持率では互角の2人の動静が報じられない日はない。

だが、「台風の日」とささやかれているのがルベン候補だ。02年大統領選で社会党公認のジョスパン首相を破って決選投票に進み、世界を仰天

させた。欧州統合・拡大への懐疑論の広がりや、05年秋の暴動が火をつけた反移民感情でさらに勢いに乗り、個人支持率ではロワイヤル、サルコジ両氏に次ぐ3位、主要政党にとって最大の脅威といえる。

■ ■ ■
右翼伸長の背景に、政治家のエリート臭が強く、国民から縁遠いイメージがある。実際、シラク大統領が記者の質問に応じるのは、G8サミットなど国際会議や外国首脳との共同会見ぐらいだ。

そんな批判を意識して、国民への接近を試みる政治家も増えた。ドビラン首相は就任らい月1回の記者会見を欠かさない。質疑時間はたっぷりあり、手が挙がらなくなるまで続く。

ロワイヤル候補も参加型民主主義を掲げ、自分のホームページで国民から政策提案を募る。

米国ほどではないが、映像や写真を用いた戦術にも力が入り始めた。

サルコジ氏は上半身裸でランニングする姿をカメラに撮らせた。芸能誌が特報したロワイヤル氏のピキニ写真に「親しみやすさの演出」、サルコジ氏とブッシュ米大統領の握手写真に「仏世論のブッシュ嫌いを意識

した(サルコジ氏の政敵)シラク氏の罨」という噂が飛び交ったほどだ。

■ ■ ■
02年大統領選の第1回投票後、仏メディアはこぞって「反ルベン」キャンペーンを繰り広げた。その結果、決選投票でルベン氏は大差でシラク氏に敗れたのだが、「まるで翼賛体制だった」と自戒する声は仏人ジャーナリストからも聞かれる。もし、再びルベン氏が躍進した場合、果たして同じ手法は通じるだろうか。「メディアの犠牲者」として、かえってルベン同情論が広がると予測する専門家がいる。

政治家だけでなく、メディアも国民から遊離しているという声も聞かれる。05年の欧州連合憲法の批准を問う国民投票で、主要な政党とメディアが賛成を論じたにもかかわらず、国民はノンと答えたのはその典型だ。

人々の声なき声にじつと耳をすませなければ、政治を動かすエネルギーもわからなければ、メディアへの信頼も得られない。そう痛感する。

さわむら・わたる 1986年入社 ニューヨーク 欧州総局(ロンドン)などを経て 04年パリ支局 この1月10日から同支局長

普天間移設

先行き不透明 反対派に初の逮捕者も

▶外間 聡
(琉球新報社)



米軍普天間飛行場の返還合意から10年目の2006年、移設先の名護市はなお揺れ続けた。1月の市長選で当選した島袋吉和市長は4月、同市辺野古キャンプ・シュワブ沿岸部にV字形に2本の滑走路を造る案で電撃的に政府と基本合意。

11月の県知事選では、国との太いパイプを訴えた仲井真弘多氏が当選し、年末には国、県、地元自治体でつくる移設協議会が再開された。しかし、三者間にはズレもあり、先行き不透明感は依然ぬぐえない。

名護市幹部は、知事選直前の11月6日の地元紙に目を疑った。代替施



名護市辺野古の米軍キャンプ・シュワブ

設の建設計画をめぐり、米側が滑走路の双方方向からの離着陸を可能にする進入灯4カ所の設置を求めている」と紙面は伝えていた。久間章生防衛庁長官も翌7日の国会答弁で「緊急時の集落上空飛行はある」と述べ、名護市側の疑念に拍車をかけた。

「寝耳に水だ」。この報道に島袋市長は憤りをあらわにした。「V字滑走路は航空機が住宅地の上空を飛ばないために考え出された案。米側要求は基本合意の根底を覆す。到底、容認できない」と態度を硬化させた。

結局、12月の日米協議で米側が折れ、進入灯は2カ所に設置することや落ち着いたが、米側はなおも訓練や有事の際の住宅上空飛行を想定。

「乗員の生命にかかわる場合に限られる」(久間長官)とする日本側との認識の落差が浮き彫りになった。

名護市は双方方向飛行問題以外にも、日米が合意した1800メートル滑走路の短縮や基地使用協定の締結を求めるなど、代替施設の規模や運用面でも注文を付けるが、こうした基本案件さえ先送りされている現状がある。

県内移設容認派の仲井真知事と国、名護市の関係も微妙だ。V字案について新知事は「県の頭越しに決めた」と否定し、三者の協調路線の中でねじれが生じている。妥協点を探る意向も示すが、その場合はV字案反対を掲げた選挙公約との整合性が厳しく問われることになる。

県知事選で建設業者を核とする北部の経済関係者は「野党候補が当選すれば、北部振興策はストップする」と猛烈な集票活動を繰り広げた。99年の閣議決定に基づく10年1千億円の北部振興策が5月の米軍再編に関する閣議決定で廃止され、危機感を募らせていたためだ。

政府は、基地移設の進ちょくにに応じて配分する米軍再編交付金の創設や北部振興策の継続をこに移設協議を進める構えだが、地元には「出来高払い」に対する不満もくすぶる。アメとムチを露骨にちらつかせて地

一口メモ 名護市

沖縄本島北部地域(通称やんばる)にあり、名護町など5町村が合併し、1970年に市制を施行。人口59520人(2006年10月末)、面積210.24平方キロメートルで、竹富町、石垣市に次いで県内3番目に広い面積を有する。2000年の主要国首脳会議(小笠原サミット)の開催地。「小笠原」を標榜し、「情報都市」を目指している。1月には日本一早い桜祭りが行われ、県内外から多くが訪れる。

元に譲歩を迫る政府の手法が、どこまで通用するかは未知数といえる。

一方、9月には反対派住民に衝撃が走った。キャンプ・シュワブでの文化財調査を妨害した疑いで、抗議運動をしていた市民団体代表が逮捕されたからだ。普天間返還合意以来、反対派に逮捕者が出たのは初。米軍再編の実施に向けた政府の強権的な姿勢が明確になったといえる。

知事選の結果に反対派の落胆は大きい。「負けない闘いを積み重ねていく」と座り込み行動など反基地闘争を粘り強く継続する構え。今後、新基地建設に向けた埋蔵文化財調査や環境影響評価(アセスメント)などが本格化するが、辺野古の現場では緊迫した局面が続きそうだ。

ほかま・さとる 1990年入社 東京報道部 政経部県政担当などを経て 2006年4月から北部支社報道部長

初任地の札幌支局に赴いたのは昭和30（1955）年である。時代は戦後ナベヅコ景気のただなか、新聞社でも大卒採用を控える社が多かった。

リレー エッセー

北国支局① 札幌

日本も貧しかったが、それ以上にぼくは貧しかった。なにしろ学生時代に一度も北海道に旅したことがない。そこで支局勤務はただ見ぬ札幌を志望したが、だれも雪の遠隔地なんぞ希望した者がいない。いつべんに希望はかなえられた。

当時、札幌のような支局勤務者には寒冷地手当（一名、石炭手当）が支給された。一冬で1カ月分の給料ぐらい（たぶん1万円程度）だった。それが一冬のストーブ暖

房代だったが、そんな金は雪が来る前にとくに飲んでしまった。腹を温めたあととはもつぱら寒さにふるえて眠る始末だった。

そんな札幌はスキノのはずれ、雪降りしきる場末のツブ焼きの屋台の石炭ストーブにあたりながら、北

炭ガラのようなものさ

る。

炭ガラとは石炭ストーブの燃えガラのことだ。そのころは朝になると一家の主婦はストーブの中の燃えかすを家の前の雪の道に捨てるのが日課だった。滑り止

▼石井 英夫

めであ
る。とこ
ろがそれ
は雪どけ
の春にな
ると乾燥して空に



の心を温つたためたんだ。おれたちの書いた記事が一晚は人の心をいやしたと思えばそれで十分ではないか。もって瞑すべし。だから人の心を温めるような記事を書けよ」

あれから50年。半世紀が過ぎて

も、Nさんの言葉はいまもぼくの耳底に響いている。しかしそんな記事が書いたことがあったか、いやとても自信はない。（産経新聞論説委員）

今号からは駆け出しのころ、北国の支局を経験した会員の「青春時代」のリーです。

第352回会員資格委員会（書面）

1月1日付の会員入退会を審議し、理事会に答申した。

第433回理事会（書面）

日本経済新聞社から創刊130周年記念として寄贈された300万円を日本記者クラブ賞規約に基づき、クラブ賞基金に繰り入れることを決定した。

■寄贈書

共同通信ニュース予定2007

共同通信社

2006NHK年鑑

NHK放送文化研究所

日本新聞協会60年史

日本新聞年鑑'06'07

日本新聞協会

日本民間放送年鑑2006

日本民間放送連盟

■会議報告

第360回企画委員会

（12・7 大会議室）

「2007年予想アンケート」の問題10問を作成した。事務局から「第6回アジア取材団」（インドネシア・ベトナム）について説明した。

出席 宇治委員長、石井、春名、田崎、川戸、井田、和田、廣瀬、國府、中島、藤村、柴田の各委員。

■HP会見速記録100本 年末にUPした福田越夫首相の「波高し日本丸の進路」（1977・1・27）が、ちょうど100本目の「会見速記録」でした。こうした過去の重要ゲストだけでなく、現在進行中の研究会「アメリカの底流」「中国」「中東ベシツク」などの講演記録も収録されています。「資料室・会見速記録」にアクセスを。

小泉純一郎とは何者だったのか

浅川 博忠

(山形新聞客員論説委員)

郵政造反議員の復党は参院選にどのような影響を与えるのか！この問題の根源のすべては小泉前首相の05年8月8日の決断に立脚していることになる。変人と呼称される彼の改革や政治手法・政局運営は安倍首相以降の日本政治に何を残し、どこを変えていくのだろうか。そしてその功罪とは？ これらを点検しつつ、内外に難問山積みの政治の進路を模索していく必要もあるろう！この視点で前首相と抵抗勢力とは何者だったのかを説明。

(講談社文庫 500円)

自治基本条例をつくる 「みたか市民の会」がめざしたもの

内仲 英輔

(朝日新聞出身)

自治体の憲法といわれる自治基本条例を地元に制定させる運動に参加した。行政に先駆けて「市民案」を提示して働きかけるといふユニークな運動だったが、市民参加を皮相的にしか理解しない行政と、旧態依然たる運営を続ける議会の壁を突き崩せなかった。

そのてん末を反省をこめて記録し、いくつかの問題提起をしたのだが、この際「自治基本条例」というものの入門書を兼ねようと二兎追った試みは成功したかどうか。

(自治体研究社 1680円)

わが終わりにわが始めあり 上下

エリザベス・バード著

大藏雄之助・訳

(TBS出身)

男子の世継ぎがない場合に女王を認めているヨーロッパでも女性の元首は久しく歓迎されなかった。プリンセス誕生と聞くと、国王も王妃も国民もみんな嘆いたという。

女性の王位継承者に有力な外国の王子を配偶者に迎えれば相手国の影響を受ける。国内の貴族から夫を選べば周辺の嫉妬で王権は安定しない。何よりも女王は妊娠中は行動が制限されるし、出産で死亡することもある。エリザベス一世はあえて独身を貫くことによってイギリスを強国に導くことに成功した代わりに、当然直系の子孫はなかった。

当代随一の美女とうたわれたスコットランド女王メリー・スチュアートは恋のままに生きてついに王冠を

失い断頭台に消えたが、何とその息子はイングランドの玉座についた。

(麗澤大学出版会 各2520円)

ウエルチの哲学 「日本復活」

長谷川洋三

(日本経済新聞出身)

経済記者として39年。企業を動かすのは人だという確信を得た。その一人が、米GE(ゼネラル・エレクトリック)会長のジャック・ウエルチだった。初めは近づくのが難しかった。日本の記者とのインタビュに興味を示さなかった。何度も手紙を出し、時には体当たり取材を試みた。ウエルチを知る有力者の推薦が糸口となって出合いのチャンスが生まれた。出た記事を見てウエルチが納得した。それから始まった約15年にわたる交流からできたのが本書である。

「ミスターハセガワがカーペットの下からでてくるのではないか」。そんな冗談がウエルチの口から飛び出したことを聞いて、苦い時代を思い出した。(講談社+a文庫 820円)

私の半世紀 三木正遺稿集

元サンデー毎日編集長、三木正氏の遺稿集「私の半生記」が、17回忌に当たる昨年夏遺族によって出版された。最初に姫路中学、旧制姫路高校時代の腕白ぶりが面白く描かれている。東大を経て毎日新聞記者に。社会部時代には三鷹事件、造船疑獄などを手掛け、デスクとして「60年安保」報道に携わったが、それぞれの記述に敏腕記者の筆力があふれており、興味深い一書である。ご希望の方は、記者クラブ事務局まで。

池田 龍夫 (毎日新聞出身)

司馬さんの優しさと期待 30年以上前の総会記念講演(76・5・28)を、昨秋、HPに収録したのでも聞いた人にも聞かなかった人にもお薦めしたい▼狩猟民族と稲作民族の情報に対する態度、認識の相違を、司馬さんが歴史をふり返って語ったものだ。当時、私はネコに小判だったが、これは先

輩記者の遺言なのだ、今回、知った▼講演の最後はこんなふう。情報、観察を重視し、しっかりした認識力を持つ態度がいま急に身につくなくとも、そうした態度の弱いところが欠点だという認識を深めるだけでも、前進することができるとは思わないかと思つて、今日はそういう話を聞いてもらつた、と。

(玄)

●「クラブ賞」の推薦 今月末が締めきりです

取材、報道、評論活動などを通じてジャーナリストとして顕著な業績をあげ、ジャーナリズムの信用と権威を高めた個人を「日本記者クラブ賞」候補としてご推薦ください。締め切りは1月31日（水）です。

○囲碁の会 大軒杯●

牧野会員が優勝

囲碁同好会の年末恒例行事「大軒杯争奪囲碁大会」が12月16日に開催され、牧野賢治会員（毎日出身）が初優勝を果たしました。まず、参加した35人が4グループに分かれて3局を闘い、全勝者4人による決勝トーナメントを行いました。いつになく進行に差が出てしまいました。決勝の組み合わせが決まったのは終了予定時刻の午後6時近く。



牧野さんの4子局で始まった決勝は、序盤で黒が堅実に白石を捕らえ、やや先行、中盤から終盤にかけて白・堀川敏雄さん（共同出身）が猛烈に追い上げる展開に。形勢不明のまま、最後局面

会員インタビュー

1971年生まれ。初来日が14歳のとき。つくばで開かれたピアノの国際コンテストで3位に入賞した。

そのわずか9年後の94年に外交官として日本にやってきた。北浦和にある国際交流基金の日本語学校で学ぶ。「25人中のトップで卒業しました」というだけあって、かなり流暢な日本語をこなす。昨年9月に現在のポストで再来日だから年のわりには日本経験が豊富だ。

10年前の日本と今の日本、違いますか？「若い人が、'外国的'になっただけ」というコメントはどちらかというと批判と受け取ったが、新潟へ行って中越地震の被災地を視察したとき「被災者が明るいことに心底びっくりした」と、これは賛美のコメントだった。



ハニー・サラ・モスタファ

エジプト大使館プレス&メディアオフィス代表

日本人は地震を含めて、自然現象に対しては、「自然のやることだから仕方ない」という感じがあるが、エジプトにはそういう感覚はあるのだろうか？「ある。けどそれは自然に対してではない。神に対して。仕方ない」と感じる。日本へ来る前は、東欧の国で領事を務めたが「あまり気が進まなかったけれど、母親から、それも神様のおぼしめしだと思いなさい」と言われて納得してしまった」とのこと。自然災害に対する日本人の「仕方ない」とは少し違う。

日本人は地震を含めて、自然現象に対しては、「自然のやることだから仕方ない」という感じ

日本では、東

日本では一番やりたいことは？「東京以外の人々にエジプトを知ってもらうこと」というわけで、プレス&メディアオフィス代表としては、特に地方メディアとのコンタクトを深めたい、とのことだった。（春海）

早打ちが奏功？うれしい初優勝

4月に入会した新参加者が、初めての「大軒杯」で優勝できるとは、つゆほども考えていませんでした。最下位クラスで3連勝して、置碁になるトーナメントでは有利かな、とは思いましたが、無心に打ったのがよかったのでしよう。

じつはこの日、家族との食事の約束があり、6時に赤坂で落ち合う予定でした。ところが優勝戦が終わったのは7時半。大幅に遅れて合流しましたが、早く負ければ遅れないですむと、長考型の私がいともより早打ちをしていたのです。考えすぎなのがよくあったのか。普段はもっぱらインターネットで観戦、時に対局という日々。まじめに碁の勉強をしているわけでもないのに、優勝はラッキーでした。

牧野賢治

安倍・小沢の大勝負

参院選論

ことしは参院選の年だ。52歳の安倍晋三首相が昨年9月誕生。まさききに中国、韓国を訪問し、小泉政権で途絶していた首脳会談を復活させ、上々の支持率で船出した。

が、郵政造反議員の復党、道路特定財源の一般財源化をめぐる決着の仕方などで、12月初旬には支持率が50%を割る。

7月の参院選までどう態勢を立て直すのか。初めての戦後生まれの首相が、最初の審判を受ける選挙でもある。

クラブにとっても公示日直前に主催する「党首討論会」はビッグイベントになる。総選挙で6回、参院選で2回の実績があるが、これまでの経験を踏まえ、より充実したものにするよう工夫しなければならぬ。

その前4月は統一地方選。東京、北海道ほか10県で知事選が行われる予定。都知事選では、有力候補を個別に招き連続会見を行っているが、これも討論会形式にするのがいいのかどうか。いずれも企画委員会を検討してもらおうことになる。

政治決戦の年と言ってもいいだろう。前哨戦というわけではないが、

1月には外遊と党大会の合間をぬって、安倍首相がゲストとして会見のぞんでくれそう。あまり間をおかず、民主党の小沢一郎代表登場の目鼻もつきつつある。

温家宝首相はサクラのころか

外国要人の来日も続く。1月はスペインのサパテロ首相、モザンビークのゲブーザ大統領、2月はチエコのクラウス大統領、モンゴルのエンフバヤル大統領。3月はシンガポールのリー・シェンロン首相が決まっている。

ロシアのフラトコフ首相、オーストラリアのハワード首相、イタリアのプロデイ首相も検討されている。3月か4月には中国の温家宝首相も訪日するのではないだろうか。いずれもクラブゲストとして招き会見をお願いしたいものだ。

各国元首、首相の公式会見を、各社公平に、かつ国際儀礼をみたした形で行うために、日本記者クラブは設立された。

だから、こうした要人が来日した場合は、有力社が単独でインタビュアーをするようなことは自粛してもらいたい。そうでないと勢い二番煎じのゲストしか招けないことになって

しま。国内ゲストは当然各社の自由競争なのだから。

クラブ会見の「意義」再確認

それだけでない。会員社が足並みをそろえてナショナル・プレスクラブでの元首・首相会見を実現させるように力を結集しないと、結局、元も子もなくしてしま。ユドヨノ大統領（11月）やシン首相（12月）のときのよう、国会演説や安倍首相との15分程度の共同発表だけで終わってしま。

このクラブでの会見は、訪日した元首・首相が時の政府とは別に、国民相手の外交をする場としての意味合いも持つ。こうしたクラブを、新聞、通信、放送各社が自前で、政府から完全に独立して運営、維持していることの意義と責任を再確認しなければならぬ。元気なジャーナリズムとその矜持のためにも。

「感動」も記事化してほしい

せっかくプレスのために、貴重な時間を割いてクラブで会見しても、記事にもテレビニュースにもならないのでは、ゲスト側としては不満だろう。だんだん足が遠のくことにも

なる。

このクラブの会見では、待ちの姿勢でなく、質問によって積極的にニュースを引き出し、それを読者、視聴者に伝えるようにしてもらいたい。加えて、こんなこともお願いしたい。

ストリートニュースがなくても、その人柄や話が感動を呼ぶものなら、なんとか記事化してあげてほしい。菊池寛賞授賞式の当日（12・1）に行った旭山動物園の小菅正夫園長の会見で、このことを痛感した。あれだけ出席者を感動させたのだから、やはり何らかの形で扱ってもらいたかった。

野生動物のすごさや魅力を行動展示でみせ、人々に感動してもらい、「命」を伝えるのがこの動物園のテーマだという園長は、こんな発言もしたのだ。

「命」という言葉は伝えることができるが、教えることはできない。でも一人ひとり、必ず自分自身の中に「命」を埋め込んでいる。動物も魚も植物も。「命」はふれあい、接触からしか認識できない。だから、最初に「子ども牧場」をつくったのだ、と。イジメによる自殺、親の子殺し、子の親殺しのニュースがふられていたころのことだ。

（専務理事 岩崎玄道）

情報発信

クラブ施設では会員による各種の会合が行われています。企業や大使館などの賛助会員も記者発表の場としてクラブを利用しています。

■日米外交政策対談「ODAと国際協調—アメリカ中間選挙の結果をふまえて」主催：アジア財団日本事務所
バリー・ハイガー元米議会政策顧問、フランク・ジャヌージ米上院外交委東アジア担当・民主党上級スタッフ、河野太郎衆院議員らがODA政策の国際協調の意義と必要性について討論した。(11. 30 10階ホール)
照会先：アジア財団日本事務所 Tel：03-3292-8801
<http://www.tafjapan.org/>

■OECD東京政策フォーラム
ケン・デイビスOECDシニアエコノミストが中国の投資政策に関して講演した。(11. 30 10階ホール)
照会先：OECD東京センター Tel：03-5532-0021
<http://www.oecdtokyo.org/>

■日本外交協会例会
外務省の河野雅治総合政策局長が「中間選挙後のアメリカ外交と国際政治への影響」のテーマで講演した。(12. 1 宴会場)
照会先：日本外交協会 Tel：03-3584-6200
<http://www.spjd.or.jp/>

■読売・中公 女性フォーラム21「熟年クライシス」
主催：読売新聞・中央公論新社
男女共同参画をテーマに現代の女性と社会のあり方をともに考えるフォーラム。ノンフィクション作家の工藤美代子さん、詩人・小説家のねじめ正一さんらが熟年男女の心の問題などを討論した。(12. 2 10階ホール)
照会先：読売新聞社調査研究本部 Tel：03-3216-7736

■第2回「アニバーサリー乳がん検診」ミニエッセイ授賞式&会員パーティー
「メノポーズ（更年期）を考える会」は更年期世代の女性の健康支援活動の一環として乳がん検診率向上を目指し、メノポーズ大賞など三賞を贈っている。その授賞式と会員パーティーが行われた。(12. 4 宴会場)
照会先：NPO法人メノポーズを考える会 Tel：03-3351-8046 <http://www.meno-sg.net/>

■第2回中外製薬・C型肝炎セミナー
C型慢性肝炎におけるインターフェロン治療について、武蔵野赤十字病院の泉並木先生が全国紙や医療専門誌の記者を対象に講演した。(12. 6 大会議室)
照会先：バーソン・マーステラ Tel：03-3264-6693

■開高健とヌーヴォーの会
作家・開高健の命日(12. 9)にあわせて行われる年末恒例の会。作家の角田光代さんが講演したあと、出版社の編集者、文化人、ジャーナリストらが権詰めのボージョレヌーヴォーをあげ、故人を偲んだ。(12. 8 レストラン・アラスカ)
「開高健記念会」<http://kaiko.jp/>

新しいOB会員

■第164回生命科学フォーラム

医学、医療、医薬担当記者の勉強会。「性の不思議—『性分化機構の解明』に向けて」と題して基礎生物学研究所の諸橋憲一郎教授が講演した。(12. 11 宴会場)
照会先：生命科学フォーラム事務局 Tel：03-5565-9277

■東京写真記者協会総会・懇親会

加盟36社会員の年次総会後、2006年協会賞などの授賞式が行われた。協会賞は「『声』が聞こえる—JR福知山線事故から1年」の読売新聞東京本社尾崎孝記者が受賞。(12. 12 10階ホール)
照会先：東京写真記者協会 Tel：03-3574-0390

■「大原御幸異聞」記者懇談会

1月に新国立劇場で公演される「大原御幸異聞—建礼門院、寂光の面影」について脚本・演出の土井陽子さんが文化・学芸記者と懇談した。(12. 13 小会議室)
照会先：土井陽子プロジェクト Tel：090-4748-8087

■第19回「ケーブルマン・オブ・ザ・イヤー 2006」贈呈式

ケーブルテレビ業界の発展に貢献した個人・団体を顕彰する「ケーブルマン・オブ・ザ・イヤー 2006」の贈呈式が行われ、嶺南ケーブルネットワーク(福井県)の西野幸二常務取締役が表彰され、また緊急地震速報プロジェクトチームに特別賞が贈られた。(12. 14 10階ホール)
照会先：中間法人ケーブルテレビ情報センター Tel：03-3549-0875

■21世紀山形県民会議<山形新聞、山形放送提唱>

山形県の発展に向け各界代表が意見交換する年末恒例の会議(32回目)。相馬健一山形新聞・山形放送会長のあいさつの後、加藤紘一衆院議員はじめ県関係国会議員7人と県内企業のトップらが「山形のものづくり」をテーマに討論した。(12. 16 10階ホール)
照会先：山形新聞報道部 Tel：023-622-5271

■日本ジャーナリスト懇話会12月例会

「日米安保と核危機」のテーマで宮田謙一朝日新聞論説副主幹と古本陽荘毎日新聞政治部記者が講演した。(12. 19 宴会場)

■木村貢さんの出版を祝う会

自民党宏池会の事務局長を長年務めた木村氏が『総理の品格 官邸秘書官が見た歴代宰相の素顔』を刊行。宏池会関係者と政治記者らが祝った。(12. 20 宴会場)

バー、レストラン、宴会

予約電話 和食3503-2723 洋食3503-2766

**吉
カクテル****スタンダードジャズ・シリーズ****1月は「Coffee Rumba」**

カクテルとノン・アルコールの

2種類を楽しんでいただくシリーズ。新年はアイリッシュ・コーヒーにアイリッシュ・ウイスキーと生クリームを加えたホットカクテルからスタートします。

**和
食****あんこう鍋コース(3,780円)がおすすめ**

(2月5日～3月2日まで)

みそ味のだんご鍋でことしも温ってください。残り汁でこしらえる雑炊までおたのしみいただけます。みそ味を洗い流すようなすっきりした長野・諏訪の冷酒「真澄」(ボトル:2,700円)も用意しています。

鍋:あんこう、ゴボウ、芹、豆腐、白菜、長ネギ、椎茸、舞茸、くずきり

先付、刺身、雑炊、アイスクリーム

好評のふぐ特別コース(5,880円)は2月2日まで提供しています。(板長:薬科浩)

**洋
食****カニづくしコース(3月2日まで)**

3種類(トラバ、ズワイ、ワタリ)のカニを使ったコースをおためしください。前菜一品はトラバガニの和風炙り焼き、スープは中華風で、メインはワタリガニのクリームグラタンにカニ肉ピラフがつきます。これにグラスワインとデザートがついて4,200円です。(シェフ:黒須修一)

<招待券> ご寄贈いただきました

▶日本経済新聞社『オルセー美術館展』『千住博展』『川崎小虎と東山魁夷展』▶日本新聞協会「2006年報道写真展」

<会員現況> 法人会員 146社 基本会員 811人
個人会員 1,635人 法人・個人賛助会員 75社 185人
特別賛助会員 76人 名誉・功労会員 10人
計 221社 2717人**クラブの電話 ダイヤルイン**

和食レストラン(9階)	会員事務
3503-2723	3503-2725
洋食レストラン(10階)	経 理
3503-2766	3503-2728
貸室予約、宴会打ち合わせ	
3503-2724	
受 付	会見申し込みアドレス
3503-2721	kaiken@jnpc.or.jp
クラブ行事への申し込み	URLアドレス
3503-2722	http://www.jnpc.or.jp

会報委員会

委員長=住田良能

委員=池谷 忍 石田昭彦 伊藤三郎 仙石伸也
高橋利行 西田善夫 松本侑千子

連絡=長谷川和子 本庄五月

(電話 03-3503-2752 FAX 03-3503-7271)

「2007年予想アンケート」を同封しました

投票は1月26日(金)までに

今月号と一緒に「2007年予想アンケート」の投票用紙をお送りしました。地方会員や11日の新年会員懇親会に出席できなかった方は、FAX03-3503-7271または郵送でお送りください。締めきりは26日(金)です。ふるって応募ください。

コートをお間違えのないように

冬本番のこの季節、クロークでコートの間違えが起きています。ハンガーに番号札をつけてありますので、ご利用の際は番号札の片方をお持ちください。お帰りの際は、その番号札とハンガーの番号を確認のうえ、お間違えのないようにお気をつけ願います。

メールでの会合案内をお勧めします

はがきやファクスでの「お知らせ」に替わり、電子メールでの案内を希望される方はメールアドレス、社名、氏名を明記したメールを、下記のアドレスへお送りください。

急に決まった会見の案内も会見中止や日時の変更のお知らせも、電子メールの方にはすぐ対応して連絡することが可能です。

会合案内・受付アドレス kaiken@jnpc.or.jp

H P <http://www.jnpc.or.jp/>**「会見速記録」:12月の新規掲載**

- 胡鞍鋼・清華大学公共管理学院教授「中国第11次5カ年計画 目標と考え方の変化」(2006.11.21)
- 福田赳夫首相「波高し 日本丸の進路」(1977.1.27)

今後の行事予定(12/21現在)

- 1.12(金) 15:00~16:30(宴会場)
研究会「若者と教育」②
藤原和博杉並区立和田中学校校長
- 1.15(月) 14:00~15:00(10階ホール)
大田弘子経済財政担当相記者会見
- 1.23(火) 14:30~16:00(宴会場)
研究会「中国」③
高原明生東大教授

研究会「2007年経済見通し」

- 1.19(金) イェスパー・コール メリルリンチ日本証券
チーフエコノミスト
- 1.24(水) 加藤 出 東短リサーチチーフエコノミスト
- 1.29(月) 早川英男 日本銀行調査統計局長
- 1.31(水) 木内登英 野村証券金融経済研究所シニア
エコノミスト

*時間・会場はいずれも15:00~16:30(10階ホール)

行事案内専用電話 03-3503-3764

日時の変更なども含め、最新のクラブ行事をテープでお知らせしています。

写真回廊

撮影 大野 明 (朝日新聞社 写真センター)



ベイルート市内で「心のケア」を受ける避難民のこどもたち (2006. 7. 28)
2006年東京写真記者協会奨励賞一般ニュース海外部門受賞

「恐怖」の行方

この子はその大きな瞳でいったい何を見てしまったのだろう。死とか別れとか、破壊とか苦痛とかを明確に理解するにはまだ幼すぎるだろうに、しかしこの子の全身にはすみずみまで恐怖が入りこんでしまったに違いない。

昨夏のレバノン南部を舞台にしたイスラエルとヒズボラの戦いで、イスラエルの空爆を逃れてベイルートに避難してきた子どもたちは、NGOの手で「心のケア」を受けているが、夜を怖がり、親のそばを離れたがらないという。

終わりがなくに見える対立と憎悪が「テロ」と「反テロ」という形で武力衝突の連鎖を生む。もの心もつかないうちに浴びた武力の洗礼は、やがてどういう形にもせよ、彼らの生き方を左右することになるのだろう。

恐怖の体験がやがてそれを払いのけるための勇気を生み、行動に駆り立てるといふことも……。

一つの記事が心に残った。ノーベル平和賞を受けたバングラデシュのムハマド・ユヌス氏の授賞式での言葉――

「武力ではテロに勝つことはできない。資金を鉄砲ではなく、貧しい人の生活向上に振り向ける方が、よりよい戦略だ」(06・12・11『日経』夕刊)

(田畑光永)